

審査員特別賞

「 恩師 」

経済学科 1年 川田菜摘

私には高校のときにお世話になった人がいた。その人は国語の教師で、本を読む生徒によく興味深そうに話しかけていた。

高校生の私には、文字を書く趣味があった。考えたことを文字に起こすことが好きだったような気がする。その教師は、初めて私の文章を褒めてくれた人だった。

私の書いた文章に初めて価値が生まれたのだ。課題提出の度にまた褒めて貰えるかな、と期待した。卒業アルバムには書店で名前を見るのを待ってますなんて書いてもらって、ニマニマしながら何度もその文字をなぞった。

卒業のとき、その先生が大学生の時に読んだお勧めの本を教えてくれた。学生の私には目が飛び出る値段だったので、せつかく大学に行くのだから図書館で読もうと思い、四階の奥にあった「百年の孤独」という分厚い本を開いた。

私はその本を前に呆然とした。読めなかったのだ。内容が小難しく、理解できなくて、面白くない。1ページ読むのにさえ数分かかる。そんな自分に酷く落胆した。国語の教師が大学生だった頃の学力と、今の私の学力の差を理解した。

私は自分を過剰評価していた。途端に文字を書くことが億劫になってしまった。自分の創作物に感じた価値が、自分より立場が上の大人に承認欲求を満たしてもらった満足感によるものだったことによりやく気がついた。

私はとても長い時間をかけてこの本を読み切るのだと思う。

長い時間、私の頭の片隅には、国語の教師がいるのだ。教師という職は沢山の人間と関わる。私の前にもその教師の心を動かす文章を書く生徒が居て、これからもきっと現れる。先生は私のことなどすぐに忘れてしまうだろう。私だって、社会人になれば文字を書くこともなくなる。本を出版するなんて夢のまた夢だとわかっている。

だけど、書店で私の名前を探す先生の姿を想像してしまう。